



谷川岳の歴史的ルートへ

## 谷川岳 衝立岩中央稜

山川

【日時】 2006年11月4日

【メンバー】 飯田（L）、栗原、大田原、山川

夏の終わり頃、人に薦められて『クライマーズ・ハイ』という小説を読んだ。御巢鷹山日航機墜落事故をめぐる新聞記者の葛藤を主題にしたドキュメントのような小説である。タイトルから想像するようなクライマーの話ではないが、象徴的に過去と未来をつなぐ重要な要素として、この岩壁、衝立岩がでてくる。登攀の部分の表現は少しなじみず読み飛ばしてしまったが、『下りるために登るんだ』といった1人の岩屋さんの言葉が不思議と心に残った。その後しばらくして、偶然にも衝立岩・中央稜の話があがった時、しばらくまよった。岩からも遠ざかりジムにもいけず、全く登攀力も岩勘も落ちている状態では行くべきでない。でも1ヶ月ある、調整しよう。このメンバーでぜひ行きたいと思った。

谷川岳には縦走でもきたことがないので、はじめて足を踏み入れる一瞬は緊張した。きりきりとたちあがり谷に刻まれたルンゼと壁は、これから登るのでなければ、歓声をあげたくなる見事な造形だった。この山に、かつて大勢の岩屋さんが殺到し競って登ったのが信じられないほど、秋の深まった一ノ倉沢はしんとした静けさに包まれていた。今、志もなく中途半端な気持ちでここに立っていると、眩しいほどの気持ちで岩に向かった先人たちに申し訳ないような気がしてくる。ただ無心に岩を登ることに集中しよう、と衝立岩を見上げながら思った。

取り付きまでが核心だと飯田さんが懸念していたが、雪渓はなんとかつながっていた。一ノ倉沢右岸から30mほど固定ザイルをつかみながらクライムダウンし、テールリッジ下部にむけて無事雪渓を渡り、1P念のためザイルをだしていただき、あとはFIXロープが取り付きまで導いてくれた。このロープは冒頭の『クライマーズ・ハイ』がドラマ化されたときに撮影用に設置されたという。フリクションのきくスラブと草付をたどり取り付きへ。先行パーティのあとに並ぶ。

今回は明るくなると同時にテントを出発したが、先行パーティが1組いた。一ノ倉全体をみわたしても、あともう1組が隣の中央カンテにいただけで、全部で4組しかいない。そのうちトマの2組をあわせて3組が中央稜に集中した。「烏帽子南稜に誰もいない（のに中央稜には3組も集まってしまった）のは珍しい。」と飯田さんが嘆息する。それでも覚悟していた渋滞もなく、懸念した天気にも恵まれ、薄手袋一枚くらいで登れるほど暖かい陽気と、3拍子そろっている。幸先のよいスタートだ。

パートナーは、栗原さん。そしてあとから飯田さんー大田原さんパーティが続く。

<http://www.tomanokaze.dojin.com/>



■1P フェース35m 栗原さんリード。(飯田さん)

1P目はいつも緊張する。岩も久々なので栗原さんが先行を引き受けてくれた。安定したテラスからフェース。ホールド・支点も豊富で登りやすい。

■2P ルンゼ20m 山川リード。(大田原さん)

左側面に回りこみルンゼをあげる。途中からルンゼとクラックにわかれるがどちらも登れる。クラック側を選び途中で0.75で支点を取り直上して第2フェースに進もうとしたが、先行パーティと交差せずには抜けられないのがわかる。あきらめてルンゼに戻り、先行パーティがきったところで支点をわけてもらってしばらく待つ。ビレイしている男性は、前にわらじにいた方だそうだ。同じ沢屋さんと知れると親近感が湧いてきた。先行パーティが出発したのと入れ違いに大田原さんが合流する。今日が初めての岩峰登攀という大田原さんはしかし落ち着いて安定した登り。二人で和みながら対岸の烏帽子などにみいる。

■3P リッジからフェース 15m 栗原さんリード。(飯田さん)

トラバースしてリッジ状にでてフェースにあがる。1手が悪かったが、栗原さんは見事なバランスで抜けていった。やはり先行パーティがいるので、手前のほうでピッチをきる。

■4P フェース35m 山川リード。(大田原さん)

フェースを登る。弱冠逆層ぎみだがホールドは豊富。

■5P フェース15m 栗原さんリード。(大田原さん)

テラスでハンギングぎみのビレイ。空間に乗り出した背面が寒い。核心部をじっくり吟味しながら栗原さんが突破していく。長く伸びた手足を活かし、ハング部分をA0で左のフェースに回りこみ、上のテラスへ乗り込む。トポどおりだと私にまわってくるはずだったが、先行パーティとの調整でピッチ数が狂い、栗原さんに核心部があたった。奪ってでも登れと言う先輩の教えには反するが、ありがたくそのまま登っていただいた。しかし続く大田原さんは、飯田さんのスパルタな…ではなく深い師弟愛のおかげで2P連続でリードし、この核心部をしっかり登った。

■6P フェース45m 山川リード。(飯田さん)

ルンゼからフェースを登る。ピナクル下でピッチをきる。北稜のスカイラインが見事。

■7P フェース25m 栗原さんリード。(大田原さん) 気持ちのよいフェース。

■8P フェース45m 山川リード。(飯田さん) フェースから草付ルンゼ。

■9P フェース30m 栗原さんリード。(大田原さん) 草付ルンゼ。

■10P ルンゼ20m 山川リード。浮石だらけのガラガラのルンゼを登る。終了。

先行パーティは直登しかけて『このルートは違う。』と引き返してきた。その二人に右のルンゼが正しいと教えられて、がらがらのルンゼを登るとそこが稜線だった。すぐ10mくらい横がピークになっている。先行パーティはそのままこちらにはこないで懸垂下降をはじめた。

ひとまず折り返し地点まではきて一息つく。今日は朝ごはんのキムチうどんのおかげ

で喉が渴いて渴いて仕方なかった。8P目あたりから、お水お水お水とお題目のように頭の中で唱えていたが、そのお水をようやく口に出来て人心地つく。ちょうど12:00だった。今日はじめて一ノ倉を落ち着いて眺める。紅葉の名残が、岩岩したこの沢を柔らかく縁取っていた。飯田さんがはじめて谷川岳へ登攀にきたのは、まだ18の頃だったという。以来幾度となく訪れ、岩から沢から稜線に駆け上がったそう。飯田さんの山人生の一部がこの谷に刻まれていると思うと他人のような谷川岳も少し近くなる。

後発の大田原さんたちと下のテラスで合流。4人一緒に懸垂下降にはいる。このあたりは、50m懸垂だと結び目が岩角などに引っかかって回収が困難になるのでシングル懸垂がよい、という先行パーティのアドバイスに従い、すべて25m懸垂とする。ひとつ懸垂している間に残りの3つのザイルをそれぞれもって先へ先へとセットしていく。バケツリレーのように手分けして次々とおりていった。うまく支点がみつかるときはよかったが、ほんの数mの違いで支点をみつけられず登り返したところもあった。何回懸垂したか忘れた頃、取り付きに到着。再びFIXロープをたどり、雪渓を通過し、30mほど岩場を登ると登山道に戻る。ぬかるみになっていてすべるが、人の住まう領域に戻ってきた安心感で、こんな道でも上等に思える。飯田さんはとうとう最後までアプローチシューズのまま通ってしまった。途中のピッチでは細かいところもあったが、問題なかったという。「昔は皆登山靴で登っていたんだから…」と言われて、あらためて、ジムもクライミングシューズもない時代の開拓期のクライマーの偉業を思った。

【グレード】ピッチ最高グレード V級 (A0 4級)

【行程】11/4 一ノ倉沢出合 (6:10) ~中央稜取付 (8:00) ~終了点 (12:00-12:30)  
~出合 (16:30)

【地形図】茂倉岳 25000/1

